

しっかりとしたリーダーの下、初級者でも十分に楽しめる北アルプス最奥の沢

日本を代表する黒部源流の清冽な美溪、赤木沢



黒部川源流・赤木沢上流部の滝を登る。

鷲羽岳を源頭に北アルプスを東西に分け、日本海に流れ落ちる黒部川。約90kmに及ぶ行程の約8割が険しい峡谷となっている、日本を代表する名渓だ。この峡谷は黒部ダムを境に下流が下ノ廊下、上流が上ノ廊下と呼ばれている。

下ノ廊下には、奥鐘山西壁、大タテガビン、丸山東壁など、北アルプスのみならず日本でも有数の大岩壁がある。また、すぐ西には穂高岳と並ぶアルパインクライミングの殿堂、劔岳を擁し、クライマーにとっては馴染み深いエリアだ。しか

し、下ノ廊下はS字峡仙人ダムや下流の黒部峡谷鉄道など、人工物も多く、峡谷はその元来の姿を失ってしまっている。

一方、上ノ廊下は手付かずの自然が残り、奔流とでも言うべき水量の多さのため、激流の徒渉や深い海の泳ぎでの突破など、水とがっぷり四つに向き合った潮行が味わえる。峡谷沿いの岩壁は大ききこそ下ノ廊下に一步を譲るも、水流に磨かれ削られた側壁は美しく、上ノ廊下は沢登り愛好者にとって一度は溯行したい、よき目標、憧れの対象だ。

冠松次郎、宇治長次郎と黒部峡谷

冠松次郎（1883年生まれ）は1911年に白馬岳から祖母谷へ下り、黒部の魅力を知り、その後1917年から10数年の間、黒部渓谷の開拓を精力的に行った。1925年に下ノ廊下初溯行時に十字峡を発見命名、27年には劔沢大滝下までの探査と大滝発見を行っている他、黒部本流、支流を数多く探査している。

足跡は黒部だけでなく、南アルプス聖岳や奥秩父の深谷の湖下降、1917年7月には劔岳早月尾根を日本山岳会の仲間、飯塚篤之助と佐伯軍造他の芦峯寺の案内人達とともに初登頂している。

この時代に活動していた慶應の横有恒、早稲田の舟田三郎、三高山岳部の西堀栄三郎、今西錦司、RCCの藤木九三ら、近代アルピニズムの先駆者達の眼が、穂高や劔の冬期登山や岩場の初登攀に向けられていたのに対し、冠は異色の存在だった。流れとしては奥秩父や北アルプスの谷の魅力や伝えた田部重治や木暮理太郎に連なるが、黒部というフィールドにこだわった徹底した踏査は地域研究としても優れ、山で過ごす喜び、谷の魅力を伝える紀行文は黒部の魅力、渓谷溯行の面白さを世に知らしめた。

冠の右腕となったのが、1907年の陸地測量部による劔岳初登頂の立役者である宇治長次郎だ。長次郎は田部重治や木暮理太郎とも多くの山行をともにしているが、後に冠と出会い、冠と長次郎は黒部の谷を10年あまり、雇い主と案内人という関係を超えたパートナーとして登った。

「冠、長次郎とくれば黒部」と室生犀星が冠に贈った詩にもうたわれた。劔の名ガイド長次郎は黒部の長次郎の名も得ることとなった。

実践 誰をも沢登りの虜にしてみよう 赤木沢へ、一步を踏み出そう

上ノ廊下溯行は厳しい徒渉や泳ぎも必要となり、中級者以上の世界だ。一方、赤木沢は、近郊の沢を登りこみ溪流靴での岩登りに慣れば、しっかりとリーダーの下、初級者でも十分に楽しめる黒部源流入門の沢。薬師沢合流点から上部の源流は、水量がだいぶ減少するが、まだまだ水流は勢いがあり徒渉ポイントを選ぶ必要がある。黒部峡谷の片鱗を垣間見つつアプローチし、深い淵から始まる赤木沢に入ると、美しいナメや滝が連続する。源頭では美しいお花畑を通り、縦走路に飛び出す素晴らしいフィナーレが待っている。

行程●赤木沢を登る最も楽な方法は、折立から入山、太郎兵衛平を越え、薬師沢出合まで下り、薬師沢小屋に1泊。翌日、黒部源流を溯り、赤木沢を登り、太郎兵衛平経由、折立に下山という小屋利用だ。軽装ですむので初日に薬師沢出合まで入るのも6〜7時間半位みておけば十分。足が揃ってれば1泊2日で問題のないコースだが、2泊3日で薬師岳登頂などとあわせ、黒部源流を堪能したい。

黒部源流一帯は幕営禁止のため、幕営のベースは太郎兵衛平に近い薬師峠のキャンプサイトになる。そうはいつても、黒部ダムから上ノ廊下を溯行すれば、谷の中で幕営せざるを得ない。増水への注意など幕営場所の選定には十分な注意が必要だ。02年7月、天気予報からは読みきれなかった集中豪雨で、源流の薬師沢出合は4mも増水したという。

アプローチ●折立から太郎兵衛平までは一般登山道だが、日差しが強いとかなりの暑さだ。太郎兵衛平に立つと眼前に黒部源流が広がる。薬師沢出合までの下りは一般道だが、浮石のある場所、足元の切れているところもあるので注意しよう。途中、薬師沢左徒渉点から薬師沢沿いに釣り下るのも良い。特に悪場はない。小屋周辺は源流側、下流の奥ノ廊下側のいずれにも釣りのポイントがある。



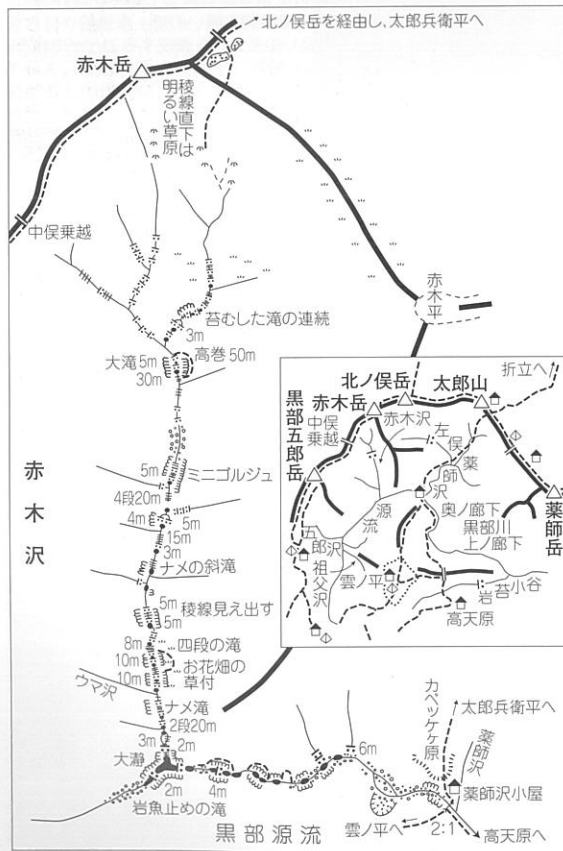
薬師沢小屋前でハーネス、登攀具をつけ、溪流靴を履いたら出発。河原へ降り右に進む。8月以降なら膝上程度の徒渉。石伝いの徒渉を4〜6回ほど繰り返すとゴルジュ帯となる。ゴルジュの滝場はいずれも右側から高巻ける。

蒼く、時には白く泡立つ清冽な美しい流れ。岩は白く、高山植物が緑色に彩る。そして、天気が良ければ空はどこまでも青く、紅葉の時期も素晴らしい。太郎兵衛平から黒部源流、赤木沢溯行はどこをとっても美しく、愉しく、素晴らしい。



上ノ廊下 徒渉

上ノ廊下でのスクラム徒渉（CMCパーティー）。





四段の滝



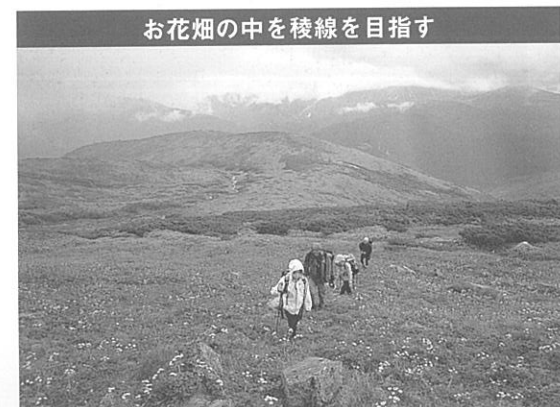
ナメ滝

4 四段の滝（左の写真は3段目）を越えると、大滝までの間はナメ、小滝が続く。いずれも階段状なので問題ない。ミニゴルジュは左の岩場を快適に越える。ハイライトとなる2段35mの大滝は豪快に飛沫を上げている。台地状の大岩で、大滝を眺め、ひと息いれていくと良い。

大滝

5 大滝は、左岸のルンゼ状から急な灌木帯を巻いて抜ける。難しい場所はないものの、足元が切れている急な箇所もあるので、初心者がいる場合はロープを出すことを勧める。慣れた者同士ならば、間隔を空け、ランニングビレイをいれた同時行動にしても良いだろう。

大滝上も小滝が続く。赤木岳から太郎兵衛平に戻る場合は、大滝上の左岸2つ目の支沢を詰めると良い。ガイドブックではこちらのコースがよく紹介されている。出合の3m滝を越えると、急に灌木が多くなり、苔むした滝なども現れ、源頭の雰囲気を感じながら、小滝を次々と登って行く。なお、右に入らず、本流を詰めると中俣乗越に出られるが、稜線まではこちらの方が早く、藪漕ぎもない。



お花畑の中を稜線を目指す

7 源頭水源で溪流靴から運動靴に履き替え、ひと休み。最後は笹原から高山植物の草原を詰める。ルートファインディング、コースの取り方次第で、若干ハイマツの藪漕ぎが必要になるかもしれないが、赤木岳の右、左いずれかの鞍部に抜け、楽しかった赤木沢溯行もフィナーレを迎える。

下山

上ノ岳（北ノ俣岳）を越え、太郎兵衛平へ。折立への下山は道もよく、足が強ければ駆け下りることができるが、足の速い仲間にあわせて無理をして転んだり捻って怪我をしたりしないよう。無理は禁物だ。

上部小滝を登る



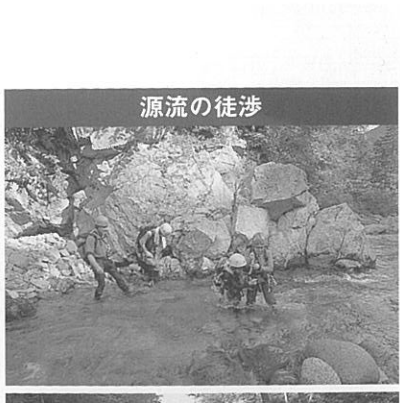
6 右の支沢の滝は大きいものはないが、階段状ながらも傾斜が急な部分もあり、万が一落ちれば怪我は免れないだろう。また、巻き気味に登れば易しいが、直登すると1、2手悪い場所などもあったりするので、リーダーはメンバーの様子をよくみてフォローしていこう。パーティー編成は3人ならば初心者は間に入れる。2人の場合、ルートファインディングがある場所はリーダーが先に登り、状況によってすぐにロープを下ろしビレイする。また、明らかに易しい場所はルートファインディングの練習を兼ね、初心者が先に登っても良いだろう。

次の二俣を右に入ると、小さな滝場となり、水量もぐんと減る。次第に前方の視界も開け、振り返ると黒部源流の山々の眺望に目を奪われるだろう。



源流のアプローチ

1 岩魚止めの滝（実際には上流にも、赤木沢にも岩魚はいる）を高巻き、谷に戻ると幅広の低い滝があり、左岸から赤木沢が出合う。赤木沢へは通常の水位ならば左岸をへつって入れるが、左岸から巻いて入ることも可能。なお、出合までは水量、高巻きラインの選択次第で時間がかかることもあるので焦らないように。



源流の徒渉



出合近辺

2 出合は狭い淵状だが、すぐに滝場が始まる。2段20m滝を右から登るが、左からも巻ける。右からビレイなしで登る自信がないなら、この先、ビレイの要否を慎重に判断していく必要がある。次のナメ滝は大きく傾斜も緩いので、水流沿いにヒタヒタと登れ、沢登りの楽しさを満喫することができる。

DATA

グレード●2級
日程●1泊2日～2泊3日（素晴らしい場所なので、ゆっくりがお勧め。薬師沢小屋、太郎平小屋とも食事も美味しい。薬師峠のテント場も眺望良く楽しい）
入山●富山地方鉄道有峰口から折立までバス利用。自家用車の場合、折立に駐車可。ただし、有峰林道は時間通行制限あり（6～20時通行可）。事前確認のこと。
適期●黒部源流は、通常7月中旬位までは雪代＝残雪の融け出しが続き、水量が多く、身を切る冷たさだ。アプローチ、溯行が可能になる適期は通常7月下旬以降で、10月初旬位までが適期となる。10月になると朝晩は薄氷が張ることもある。8月盛夏から紅葉の9月中下旬が水量も落ち着き、楽しく溯行できる時期だ。
天候判断●水量が落ち着く時期でも、直前に大雨が降った場合、源流でも徒渉困難になる。また、入山中に大雨が予想される場合も入谷は危険、控えよう。
参考タイム●折立（4～5時間）太郎平小屋（2時間～2時間半）薬師沢小屋（1時間半～2時間半）赤木沢出合（1時間半～2時間）大滝下（1時間半～2時間）赤木岳（1時間半～2時間半）太郎平小屋（2時間半～3時間）折立
2万5千円●薬師岳、三俣蓮華岳
現地情報●太郎平小屋（薬師沢小屋とは無線連絡）TEL080（1951）3030



赤木沢下流部



3 すぐ上で右岸からウマ沢が入り、ゴロ口帯を行くと周囲が開け、見映えのする4段の滝が現れる。ここは2段目、3段目は左岸の草付のしっかりした踏跡から巻くが、ぬかるんでいる時は、足元をしっかり決めて登ろう。



タープを張る

赤木沢への準備山行

ステップアップの方法と見極めだが、本書取材では沢をまだあまり登りこんでいない入門者の赤木沢アタックに備え、沢登りの勘を掴ませるため、丹沢の勘七沢に2回連れて行った。1回目は小滝もタイトロープでビレイし、安心して溪流靴で岩を登る感覚を掴ませた。2回目は前後にびったりついて、足元を見つ極力確保なしで登り、高差のある大滝はアンザイレン、他は本人が確保が必要と思う場所だけお助けロープを出す形にした。まず、自信を持って溪流靴で立つ基本と飛び石伝いや流れの中を歩く沢登りの勘を掴ませ、次に確保の要否、自信を持って登れる範囲、感覚を身に付けさせた。そんな作戦がうまくいき、赤木沢も問題なくスムーズに登ることができた。

大きな谷での状況判断

山深い大きな谷は、融雪や雪代が落ち着いた時期に、好天を狙って行く必要がある。実際に谷に入ってから滝を登ることに加え、水位によって変わってくる徒渉点や巻き道をいかに的確に選んでいくか、流れの状況を見て直登する滝場、巻きラインを総合的に判断する眼力が重要になる。

防水

黒部源流のアプローチでは、膝上程度の徒渉を行う。徒渉中に転んだりすると、しっかり防水しておかないと装備を濡らしてしまう。ザックの中に大きな防水袋をすっぽり入れ、その中にさらに各装備をビニールなどでくるんでパッキングしよう。雨蓋の中の装備も。上ノ廊下本流のように泳ぎが必要な谷では、キャラバンやモンベル社から出ている、ザック自体に防水袋を装着し、防水ファスナーを使用した防水ザックを利用するのも便利だ。

夏の沢での幕営

幕営地

増水を警戒し水面より2~3mは高く、落石などの危険がない幕営のしやすい場所を探す。コースガイドなどで確実な場所の目星がついている場合はギリギリまで行動してもよいが、日暮れの2~3時間前から適当な場所を探し、早めに幕営し、食事の準備を始めた方が楽しい。

幕営具

テントは下地が平らでないとうまく設営できないため、沢での使用には向かない。夏の谷では軽量のツェルト、沢慣れしてきたら大きめのタープ式のフライシートを張ってゴク寝など、シンプルで開放感のある幕営生活が楽しいものだ。タープは雨が降りそうな場合は降り込みを防ぐため、低く張るとよい。

足回り、その他の装備

ルートに合わせた選択をする。ロープをつけ、ランニングビレイを取って登攀する滝がある場合は、数枚のハーケンとナッツなど支点類、ハンマーが必要だ。雪渓の通過が予想される時にはアイスパイルを持っていけばビックでステップを切ったり、シャフトを刺してホールドにすることができる。赤木沢の場合は1人あたりスリングを3~4本、カラビナ4枚(安全環付き1)、確保下降器とハーネスがあれば十分。アイスパイルは雪渓が残る可能性のある7月中は持っていった方がよい。アプローチの足元が悪かったり、谷の中でもゴロ口帯などの歩きの部分の長い場合は、ステルスラバーで水切れの良いファイブテンのウォータートニーなど、水に強い運動靴を歩行用のサブシューズに使うと足元が安定する。

増水への備え

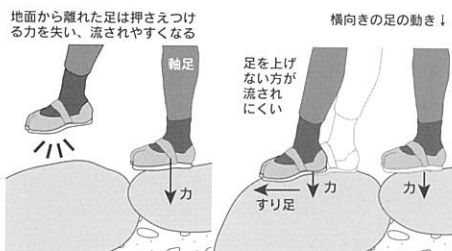
降雨、そして万が一の増水で幕営地点近くまで水位が上がった場合は、より高い場所に避難する。幕営準備をする際は増水時に避難する場所をあらかじめ確認しておく。天候に確信が持てず、避難する可能性も否定できない場合など、足場が悪かったり岩棚など上がる必要がある場所では、あらかじめロープを張っておく位に慎重であっても良いと思う。雨量、地形によっては増水スピードは早いもの。すぐパッキングできるよう荷物も整理しておこう。

準備計画

溪流靴で立つ基本と流れの中を歩く沢登りの勘を掴もう



横向きか正対か? 下流方向か上流方向か? 走り高跳びのベリーロールと背面跳び、投法のサブリンとトルネード投法など、クライミングもキョンと正対のように同じ動作でも個人によりムーブが異なる。徒渉技術は確立された技術ではないとも言われている。個人の体形、脚力にあった、信じるにたる手法を身に付けることが重要だろう



源流の赤木沢は上部でも大体7月中には雪が消えるが、豪雪地帯の深い谷では夏遅くまで雪が残る。雪渓表面は降雨や日照によってほぼ均一に融けていくが、谷底との接地面は水流の上と両岸から融ける。足を置いた時の感覚や水音の響き具合をもとに、雪渓を通過する時は厚く安定したところ、傾斜の緩い場所を選んで登ろう。雪渓に乗る時、雪渓から斜面に渡る時は特に注意が必要だ。隙間が大きく足場を切る必要があったり、隙間は見えませんが雪渓の端が薄いと思われる時など、ロープを出しビレイをして安全確保をしよう。

水の畏

大きな谷では水流自体が危険要素。水の危険は瞬間に発生し、起こってからでは対処できないこともある。増水、釜、滝、低体温症など、常に水の危険を意識しておく



飛び石伝いに渡れない、へつれない場所では水流を徒渉することになる。水深と流れの強さを見て、なるべく浅い、水流の弱い場所を選び、水底の岩や窪みをよく見て、足は一步一步引き抜くのではなく、すり足で進む。基本は流れを真横か、やや上流に向かって渡る。ストックや流木を杖として使う時は、上流側についてバランスを取るが、水流が弱ければ下流についても問題ない。赤木沢溯行でもシーズン初め、7月中は源流の水量が多ければ徒渉ポイントを選び、初心者がいる場合、スクラム徒渉やビレイをした方がよい時もあるだろう(水流が厳しい、困難な徒渉技術については158~160頁、上ノ廊下の項を参照)。

雪渓

雪渓が残っている場合の注意点●雪渓内部は水流に接する接地面から融けていく。雪渓が崩壊し雪のブロックが環となって水流をせき止める形になると、水がたまり水圧が大きくなり環が崩れて鉄砲水がおきる。雪渓の残る時期、急に沢の水量が減った場合はせき止めの可能性大。高い場所にあがって様子を見たり、溯行を続ける場合もすぐ逃げられるラインを選ぶ必要がある。写真のような場所で雪渓が崩れたらダムのようなことが想像できるだろう。

